

## 『九州・沖縄COC/COC+合同シンポジウム in おおいた 2017』概要

【日 時】平成29年10月28日（土）12:30～17:45

【場 所】大分大学 旦野原キャンパス 第一大講義室/第二大講義室

【テ ー マ】「COC+事業が目指すもの、そして…」

【参加者数】	大分大学	46名	他大学（九州内）	39名
	他大学（九州外）	3名	自治体	12名
	企業等関係者	8名	高校関係者	32名
	登壇者	20名	運営スタッフ	12名
			合 計	179名

### 【内 容】

#### 1. 主催者挨拶

北野 正剛（大分大学長）

#### 2. 来賓挨拶

広瀬 勝貞（大分県知事）

義本 博司（文部科学省高等教育局長）

（代理）庄司 祐介（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室改革支援第一係長）

#### 3. 基調提案

【提案者】越智 義道（大分大学 COC+推進機構長 理事（教育担当））

##### 【内 容】

大分地区で過去2ヶ年の間に実施したCOC+事業に関する取組を紹介した後、今回、シンポジウムテーマに「COC+事業が目指すもの、そして…」を掲げた理由や、この後のシンポジウム全体の流れを説明した。

#### 4. 特別講演

【演 題】「COC+事業が目指すもの、そして高知大学の取組」

【講 師】櫻井 克年（高知大学 理事（総務・国際・地域担当）・副学長）

##### 【内 容】

高知大学が高知県庁と共に地域の中で学生を育てる活動を通じて、地域の振興に取り組んでいる姿とその考え方の紹介があった。また、高知大学が、Super Regional University を目指すことについて紹介があった。

高知大学・高知県庁双方が本気の二人三脚で展開している取組は、多くの参加者も深く感銘を受けていた。また、大学全体が一丸となって地域志向の組織に変化していることについては、そうで無ければ生き残れないといった姿勢が十分に伝わってくる内容だった。

## 5. 分科会

### ◆ 第1分科会

【会 場】 第一大講義室

【テーマ】 「在学生・卒業生から見たCOC/COC+事業」

【登壇者】 影山 隆之（大分県立看護科学大学教授 看護研究交流センター長）  
五十嵐 勉（佐賀大学全学教育機構〈COC+事業実施責任者〉教授）  
西村 靖史（別府大学文学部人間関係学科長 教授）  
小池 楠男（大分県商工労働部雇用労働政策課 参事）  
吉野 葵（大分大学OG〈平成28年3月 経済学部卒業〉）  
高瀬 伶（佐賀大学OB〈平成29年3月 大学院農学研究科 修了〉）  
上田 亮（日本文理大学 工学部 建築学科 3年生）  
庄山 真由（熊本大学 法学部 法学科 2年生）

#### 【内 容】

現役の大学生から、学修プログラムを効果的に学生へ周知すること、他大学生との学びの場の提供や本物と出会うアクティブ・ラーニングの導入などの要望が提示された。若手社会人からは、学生時代に自分の強みを見つける事や人との出会いによる視野を広げる学びの重要性が報告され、そのためには教員の役割が重要であることとの意見が示された。また、大分県からは、キャリア教育の立場から大学教育への要望が提示された。

これらの意見・要望を受け、大学教員から現在のCOC/COC+事業の取組について報告を行った上で、会場の参加者を交えて、学ぶ立場と学びを創る立場から、これからの大学教育カリキュラムの在り方について意見交換を行った。

以上の意見交換を踏まえ、教員側から、大学や教員の役割として様々な人たちと出会える場を提供する事や、お客様感覚ではなく本当に地域や企業に入って地域の人たちの生活が見える・考えられる学生を育てていきたいとの意見が提示された。

最後に、本分科会のまとめとして、キャリア教育の連続性の重要性を共通認識するとともに、学生・大学・地域社会が本気になること、大学教育が自校の枠から飛び出して、地域企業等との協働体制づくりや県内大学の連携、さらには広域的な大学連携が求められていることなどを共有した。

### ◆ 第2分科会

【会 場】 第二大講義室

【テーマ】 「継続性のあるCOC/COC+事業」

【登壇者】 吉村 充功（日本文理大学学長室長 工学部教授）  
國武 久登（宮崎大学副学長〈産学連携担当〉教授）  
石川 雄一（大分大学学長補佐〈COC+推進担当〉理工学部教授）  
酒元 謙二（一般社団法人キャリア形成支援協議会 代表理事）  
磯田 健（大分県企画振興部政策企画課長）

#### 【内 容】

COCから開始した大学とCOC+から開始した大学の差を踏まえた上で、①地域現場でど

のような学びを意図して教育するのか、②各県の国立大学が実施している取組を九州各県が互いに認知した上で県をまたいだ活動に展開させ、その情報をどのように共有していくか、③優秀な女子学生が地域に残りたいと思える地域企業の働き方改革について、の3点について問題提起した。

それに対して、一般社団法人キャリア形成支援協議会の代表理事より、沖縄地域の民間主導で実施している大学4年・企業3年の7年人材育成教育とその経費確保について紹介があった。また、宮崎大学からは、同学の特定学部が実施しているCOC+事業と県庁との関係やインターンシップセンター構想が紹介された。大分県庁からは、COC+は地方大学の生き残りをかけた取組であり、この大学改革を通じて地域で頼りになる大学になり、それが就職と産業振興につながることや、大分県としても地域の課題を共に解決できる組織と連携したい旨の発言があった。

最後に、本分科会のまとめとして、①主体となる大学、企業並びに行政が本気になることが学生に伝わり本気にさせることにつながる、②各県の相互認証などを九州知事会や九州全体の産業界との意見交換で連携を図ることが必要であること、の2点を取りまとめた。

## 6. 全体会

【会 場】第一大講義室

【テーマ】「COC+事業が目指すもの、そして、それを越えるもの」

【登壇者】五十嵐 勉（佐賀大学全学教育機構〈COC+事業実施責任者〉教授）

井上 佳朗（鹿児島大学産学官連携推進センター〈COC+推進部門長〉特任教授）

影山 隆之（大分県立看護科学大学教授 看護研究交流センター長）

吉村 充功（日本文理大学学長室長 工学部教授）

石川 雄一（大分大学学長補佐〈COC+推進担当〉 理工学部教授）

磯田 健（大分県企画振興部政策企画課長）

庄司 祐介（文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室改革支援第一係長）

中川 忠宣（大分大学 COC+推進機構 特任教授）

### 【内 容】

(1) 各分科会から、COC+事業をより充実・発展するための取組に関する討論の結果報告並びに情報交換

《第1分科会》

- ① 授業の中で、他学部や他大学、社会人の方々等との様々な出会いが有効だった。そうした中で、視野を広げ自分の強みがわかる体験ができる学びが有効であった。
- ② 各大学が自校の中で完結するのではなく、組織的な情報交換の機会をとおして他大学に学ぶ必要がある。

《第2分科会》

- ① 社会も大学も迷ったら、地域のために行政も企業も大学も一緒にと取り組んでいくことが大切である。

- ② 各県の認証制度には違いがあり、各ステークホルダーの本気や行政・企業・大学が一緒になってこれからのCOC/COC+事業の方向性を協議していく必要がある。

(2) 各分科会からの討論結果報告を基に、今後のCOC/COC+事業が更に充実し、当初の目的を超えるため、教育改革や協働を推進する取組の提案

- ① いろいろな人との出会いが必要であり、そのことによって学生が自身のネットワークを構築できる。また、地域の人々の生活が見える、考えられる学生を育てるために、大学(教員)がそういった授業を行うことが必要である。
- ② 大学が中心となって本気で取り組む、企業・行政もそれぞれ本気で取り組んでいくこと必要がある。本気で取り組むための1つとしてのインセンティブ(認証制度)等の取組の共有と発展をどう進めていくかが課題であり、まずは行政・産業界も含めた意見交換や情報発信が必要である。

(3) (2)の提案を踏まえ、今後のCOC/COC+事業が更に充実し、当初の目的を超えるため、教育改革や協働を推進する取組について協議

- ① 学生が本気になる、能動的な課題解決や地域志向の学びを創る教育カリキュラム改革が重要であり、そのための教職員の意識改革、大学や企業・自治体としての本気度が求められる。
- ② 各大学で出来ることもあるが、大学が、大学の枠を超え、地域の枠を超えて創り出すことが求められている。

以上の取組を推進していくため、今後の担当校を中心として、九州エリアのネットワークを構築し情報交換や情報発信を行い、大学・企業・自治体の本気度を高めていくこととした。

## 7. 次期開催大学挨拶

石松 隆和(長崎大学地方創生推進本部 COC+推進コーディネータ)

## 8. 閉会挨拶

越智 義道(大分大学 COC+推進機構長 理事(教育担当))

## 9. その他

### ◆ ポスター展

【会場】 学生交流会館 ビ・フォーレ

【内容】 九州・沖縄地区の6大学が、「地域が輝くための若者を育成する教育」に関して、各COC+参加大学の特色ある取組(教育プログラム、インターンシップ事業、認証制度等)を中心にポスター展示を行った。

### ◆ 情報交換会

【会場】 学生交流会館 ビ・フォーレ

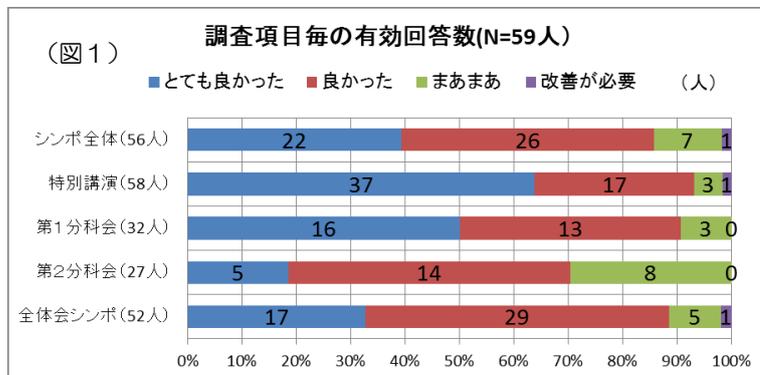
【内容】 シンポジウム開催後、COC/COC+事業関係者間の情報交換や親睦を図ることを目的として、情報交換会を開催した。(50名が参加)

## 【アンケートの分析】

シンポジウム参加者に対して、本シンポジウムの満足度等のアンケート調査を実施し、その結果を以下のとおり分析した。

### 1. 評価の概要

総参加者数は179人であったが、アンケート提出者は59人（回答率33%）だった。途中参加や、途中退席等が理由で無記入の項目もあった。図1は各項目の有効回答数を基にして集計したものである。



分析にあたっての基本的な考

え方として、本シンポジウムは様々な職種や立場の方が参加しており、また、本事業への関わり方の程度に違いがあることから、全てのメニューが全ての参加者に高く評価されることは期待できないため、概ね参加者の70%以上の満足度を目標とした。

なお、「まあまあ」の回答については、「あまり学ぶものは無かったが、こんなものだろう」という感想を持たれたと解釈し、「満足」と判断しないこととした。加えて、他の項目においても「まあまあ」との回答が多いことなどから、全体的に「あまり学ぶものは無かったが、こんなものだろう」という感想を持ったと解釈できそうである。また、3つの項目で「改善が必要」とそれぞれ1名が回答しているが、同じ回答者であり、コメントを見ても他の項目を含め全体的に厳しい評価・感想を持たれていた。これらのことを基にして、以下のように分析する。

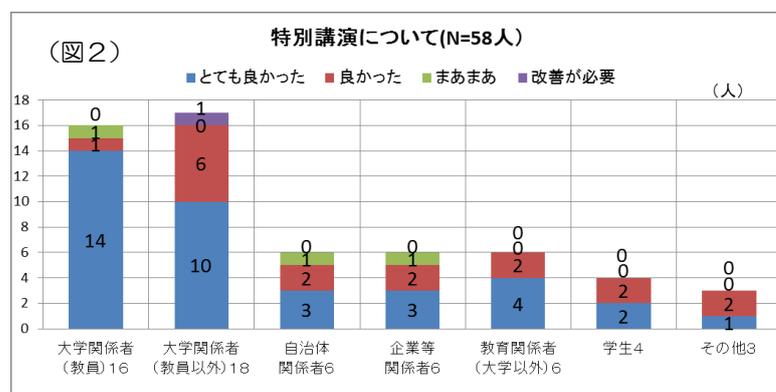
### 2. 本シンポジウム全体について

図1から分かるように、本シンポジウム全体については、「とても良かった」と「良かった」を含めると56人中48人（85.7%）となっており、高い評価を受けたと言えるであろう。また、それぞれの項目においても「とても良かった」と「良かった」を含めると70%以上であり、一定の評価をいただいたと言えよう。

### 3. 特別講演について

図2は、特別講演に関する評価を、参加者の所属毎に示したものである。

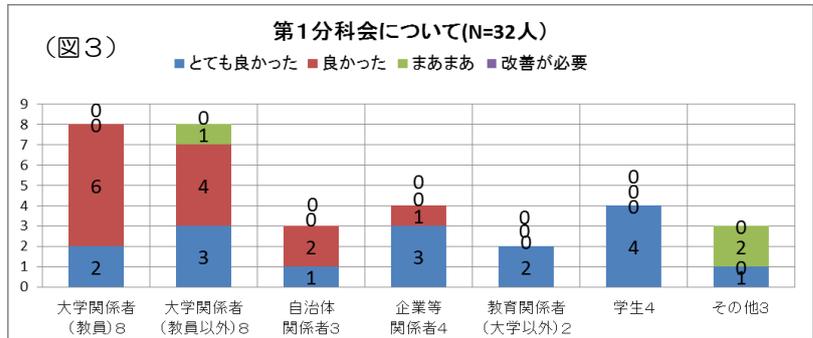
全体としては、58人中54人（93.1%）が「とても良かった」「良かった」と回答している。特に大学教員においては16人中15人であり、さらに、16人中14人は「とても



良かった」と回答していた。直接教育に関わる教員にとって、各大学での今後の取組に大きな示唆をいただいたことが分かる。

#### 4. 第1分科会について

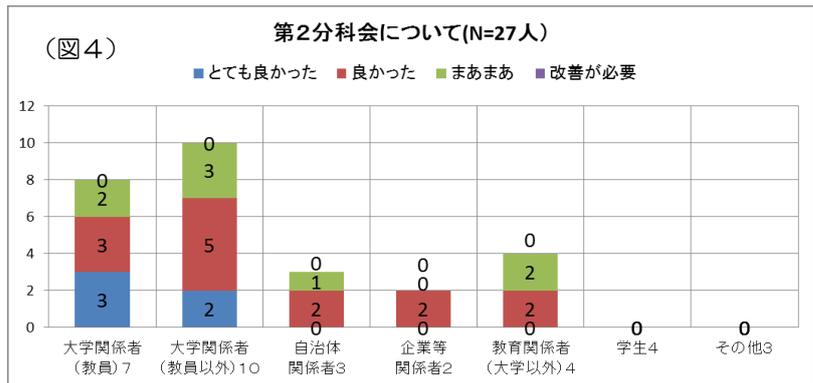
図3は、第1分科会に関する評価を、参加者の所属毎に示したものである。全体としては、32人中29人（90.6%）が「とても良かった」「良かった」と回答している。特に、大学以外の教育関係者と大学生、企業等の関係者のほとんどが「とても良かった」と回答している。しかし、特に大学関係者にとっては、もっと突っ込んだ、教育実践事例や教育プログラム改革に関する協議を求めているようである。



#### 5. 第2分科会について

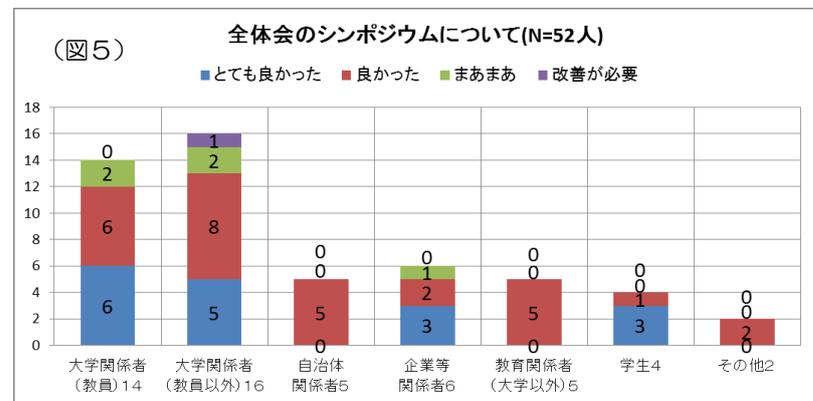
図4は、第2分科会に関する評価を、参加者の所属毎に示したものである。

全体としては、27人中19人（70.4%）が「とても良かった」「良かった」と回答している。ただ、「とても良かった」が18.5%と低くなっており、「抽象的だった」「テーマが難しかった」という意見はあったが、「今後の取組を語り合うことが出来た」という感想もあり、今後の第1歩を踏み出すことが出来たようである。



#### 6. 全体会について

図5は、全体会に関する評価を、参加者の所属毎に示したものである。全体としては、52人中46人（88.5%）が「とても良かった」「良かった」と回答しており、一定の成果があったと考えられる。ただし、「とても良かった」が32.7%と低くなっており、現在のCOC+事業が更に充実していくため、「それを越えるもの」について、C



OC/COC+に直接参画していない参加者が、あるべき方法性を共有して、共通に考える事の難しさが見えてきた。

## 7. 個別意見を踏まえた本シンポジウムのまとめ

上記のように、一定の評価をいただき今後の九州各県での取組や、大分大学COC+事業の今後の方向性について大きな示唆をいただくことが出来たと考える。また、今後の方向性についても、九州各県の取組の情報共有をとおして、COC+事業を超える取組みを目指していくことも確認できた。

しかし、以下のとおり、本シンポジウムへ要望や今後の取組に対する意見も提示された。

- ① より具体的にCOC/COC+科目の成果や感想、改善の提案などを聞きたかった。
- ② 地域創生に関する受講者がどの程度地元志向が上がった等、数値化したデータを用いて欲しかった。
- ③ COC+の金が切れた後、どのように事業を継続していくか、財政的な議論を期待していた。
- ④ テーマと協議内容を一致することや、会場との意見交流の時間（グループディスカッションやネットワークづくり）を多めに取るなどをお願いしたい。
- ⑤ 次回からは取組による成果や評価の発表が問われてくると思うので、そうした内容を期待している。
- ⑥ COC+によって、大学の存在意義やミッションが変わっていくように思えた。

こうした意見を生かしながら、次年度以降の「九州・沖縄COC/COC+合同シンポジウム」の充実と今後の九州地区の連携を提案できた大会であったのではないかと整理させていただき、参加者の方々、関係者の方々に感謝いたします。

以上